



学校便り  
No. 3

# 万里一空

令和6年4月30日(火)

文責：池田 誠

学校の学習では、「見て聞いて話して感じてそして考える」ことが大切だと言われています。幼いころ、蟻の行列がせっせと食べ物を巣穴に運んでいる様子を飽きもせずに見ていたことがあるのは私だけでしょうか。人は成長するにつれて、興味ないものは見ているようで見なくなります。今日は「見ることの難しさ」について考えます。

## 授業中は「見る」から「観る」へ



突然、全校児童に向かって、「目をつぶってください。校長先生の今日のネクタイの色は何色でしょうか。見ないで答えられる人は手を挙げてください。」という質問をしたらどうなるでしょうか。もちろん分からない児童がほとんどで、先生方でも手を挙げられる人は少数でしょう。それくらい、普段私たちはものをよく見ていません。何となく見てるのだけど、わざわざ言われなければ見ないのです。でも、言われて意識して見れば、校長先生のネクタイの色が分からない人はいません。(次の学校朝会で子どもたちに試してみようと思っていますので、言わないでくださいね。☺)

学校では、算数の授業で先生が、「この図をよく見ましょう。」と言います。また、国語の授業では、「第5段落の中で〇〇という表現を見つけましょう。」と投げ掛けます。さらに、理科の実験では、「先生がやってみるのでよく見ておきましょう。」と指示を出します。さて、本当によく見ている児童は何割ぐらいいるのでしょうか？こんなときに、本当に見ている児童と何となく見ている児童とでは、学習の結果に差が出てくると思います。

JAL 国際線のチーフパーサーとして2万時間、30年間のフライトを経験した黒木安馬(くろきやすま)さんが著した「ファーストクラスの心配り」という本の中でこう述べています。あるとき、HONDA(ホンダ)の創始者、本田宗一郎さんが乗客の中にいて、黒木さんに「牛の角と耳はどちらが前に



ついてるか分かりますか。」と尋ねられたそうです。黒木さんは答えが分からず言葉に詰まりましたが、本田さんは「見ればわかる。」と一言おっしゃったそうです。その後、黒木さんはホテルで時計をなくし、フロントでどんな時計だったか絵を描いてほしいと言われたのに、何度も見ている時計がうまく描けなかったことがありました。この時、黒木さんは本田宗一郎さんが言った「見ればわかる。」という言葉の意味が、何となく見るのではなく、意識してしっかり観るということではないかと気づきました。それ以来、黒木さんはなんでもしっかり観る癖がつき、毎日が発見の連続になったそうです。

私たちは毎日何度も見ているものでも、詳しいところを聞かれると意外にわかりません。それは意識してちゃんと見ていないからです。普段から意識してちゃんと見ていると、細かいところまでよく見えます。その結果、新しく発見することも多くなり、人が気づかないことまで目が届くようになります。これをするにはお金も道具もいりません。意識して詳しく見ようと思うだけなのです。毎日の学習にも応用できることですね。

もちろん教師側も児童が注意深く見てくれるような工夫をしないとはいけません。例えば「ポイントを絞って見せる」「一部または全体を隠して見せる」「比較しながら見せる」「形や色、音声で関心をひく」などなど、児童の興味や関心、学習意欲を高めるような見せ方をするよう努力が必要です。

このように、児童は見ることに對して意識をあげ、教師は見せ方を工夫することで、相乗効果により「見るから観る」ことができる児童に変容していくと考えます。

## 授業参観 学級懇談会 PTA 総会

本年度最初の授業参観と学級懇談会にご参加していただき、ありがとうございました。お子さんの様子はいかがでしたでしょうか。

今後も行事等で学校の様子を積極的に発信してまいりますので、ご協力のほどお願いいたします。

